

愛宕小学校の評価規準例

五年	単元名	愛宕 思いやりプロジェクト — 障害者福祉について考えよう —	
単元の目標	①福祉実践教室や学区調査から、福祉に関わる課題を見つけ、見通しを持って追究することができる。(見つける力・調べる力) ②追究してきたことをもとに、自分の感じたことや意見をまとめ、友達や周りの人に分かりやすく伝えることができる。(調べる力・表現する力) ③福祉に関わる課題を追究したり、障害のある人と交流したりする活動を通して、自分と人・社会との関わり方を見直したり、自分にできることを実行しようとしたりすることができる。(表現する力・実践する力)		
		評価規準	単元の評価の視点と評価方法
育てたい力と評価規準	見つける力	<ul style="list-style-type: none"> ・調べたり活動したりする価値のあることを自ら見つけたり、選択したりすることができる。 ・自分なりの計画や見通しを持つことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学区調査から、障害のある人にやさしい点や問題点を見つけている。(発言・ワークシート) ・福祉実践教室の体験から、福祉に関わる問題点を見つけ、課題を決めている。(発言・ワークシート・対話) ・課題追究の過程で、課題に関わる新たな問題点を見つけている。(記録用紙・対話) ・友達の活動の良さや問題点を見つけている。(発言・カード)
	調べる力	<ul style="list-style-type: none"> ・自分なりの計画や見通しをもとに、方法を工夫して取り組むことができる。 ・自分の追究や活動を振り返り、計画を見直すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・障害のある人やボランティアさんのお話から、障害のある人の実情を聞き取っている。(ワークシート) ・課題を追究する方法や手順を考えている。(ワークシート・対話) ・本・インターネット・見学・訪問など、自分の課題にあった方法で情報を収集している。(行動・記録用紙) ・次にやる課題追究の計画を立てている。(ワークシート)
	表現する力	<ul style="list-style-type: none"> ・伝える目的に応じて、聞き手を意識して自分の意見を表現することができる。 ・相手によくわかるように発表方法を工夫することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉実践教室の体験や障害のある人やボランティアさんのお話からわかったことや感じたことを自分の言葉でまとめている。(ワークシート・発言) ・調べてきたことを自分の言葉でまとめている。(記録用紙) ・自分の調べてきたことや感じたことを分かりやすく発表している。(発表)
	実践する力	<ul style="list-style-type: none"> ・学んだことを地域の中で積極的に実践したり、自分の生活や考え方に生かそうとしたりすることができる。 ・人々のかかわりの大切さに気づくことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・障害のある人やボランティアさんの話に共感したり、自分と比較したりしている。(対話・ワークシート) ・同じ内容の課題を追究している友達と情報交換したり、周りの人の意見を取り入れたりしている。(行動・記録用紙) ・友達の発表内容や活動の様子を参考にして、自分の活動を見直し、次の活動の計画を立てている。(発言・ワークシート)

実践事例

(福祉) 愛宕小学校 5年

愛宕 思いやりプロジェクト

7月～2月 (55時間)

1 はじめに

愛宕小学校から歩いて10分の距離に愛知教育大学附属特別支援学校がある。特別支援学校の子供たちと交流を行うことで、5年生の福祉についての学習をさらに深められたり、思いやりの心が芽生え、相手の気持ちを考えた言動ができるようになったりすると考え今回の実践を行った。

2 実践の概要

(1) 附属特別支援学校の子と仲良くなろう (1回目の交流)

交流に行く前に附属特別支援学校とは「特別に支援が必要な子のための学校」という説明をした。それでも、他の学校の子と交流できることに大いに喜んだ。どんなことをして遊ぼうか考える子供もいた。1回目の交流では、低学年、中学年、高学年に分かれて交流を行うことにした。交流が始まるとどう関わっていいか戸惑ってしまい、本校の子供たち同士で遊んでいる姿が多く見られた。学校にもどり、子供たちに「今日の交流の仕方は何点だったか」聞くと、ほとんどの子供が低い点数をつけていた。理由として「自分から積極的に遊べなかった」という子供たちや「どう遊んでいいか分からなかった」という子供が多くいた。

(2) 附属特別支援学校の子と積極的に遊ぼう (2回目の交流)

2回目の交流前に、どうすれば積極的に関わられるのかを考えさせた。意見では「やる遊びを考えてから交流をする」や「相手の好きな遊びを考えて交流する」というものが出た。そこでグループごとに前回の交流で何をして遊んでいたかを思い出し、話し合いを行った。「〇〇くんはサッカーが好きだった」や「〇〇さんは、砂遊びで遊んでいた」など、前回の交流を思い出して意見を出し合っていた。2回目の交流では、前回の交流より積極的に遊ぼうと声をかける愛宕の子がたくさんいた。しかし声をかけてもコミュニケーションがうまく取れずどうすればいいか迷っていた。その中でも児童Aと児童Bは、仲良く特別支援学校の子供と仲良く遊んでいた。



(3) 附属特別支援学校の子に寄りそおう (3回目の交流)

3回目の交流前に、2回目の交流で仲良く遊んでいた児童Aと児童Bに話を聞く場面を作った。児童Aは「相手がする遊びを一緒にする」と答え、児童Bは「今、相手が何をしたいのか考える」と答えた。他の子供たちも仲良く遊びたい思いが強くなっていたため、真剣に話を聞いていた。

3回目の交流では、相手に寄りそえるために交流の仕方をグループでの関わりから、相手を決めて個人での関わりに変えた。1, 2回目の交流と違い、ほとんどの子供たちが仲良く遊んでいた。交流が終わると、特別支援学校の子供たちから「バイバイ」と話しかけられている子供もいた。感想を見ると「今までは、自分たちの遊びに相手を誘う遊び方から、相手のしたい遊びを考えてすることに変わらさず楽しく遊べた」と書いている子が大半いた。さらに「今度も交流できるのが楽しみ」と答える子供が大半いた。

3 実践を振り返って

今回の実践を通して以前より思いやりを持った言動が多くなり、けんかなどのトラブルが減った。また福祉についての学習をより身近な存在として真剣に取り組めるようになった。